「ソ」錯視

村井祐基（東京大学大学院総合文化研究科）

ymurai [at] fechner.c.u-tokyo.ac.jp

＜解説＞

カタカナの「ソ」の一画目の右端点と、二画目の左端点を鉛直に並べて書くと、二画目の左端点の方が左にずれて見える。より一般的に言うと、二本の方位の異なる線分があるとき、二つの線分の端点によってつくられる方位が実際と異なって知覚される。

[ppt スライド2・7枚目] この現象は2本の異なる方位の線分があれば生じる。内側の端点は鉛直に並んでいるが、下の端点のほうが右にずれているように見える。

作図自体は小保内の角度錯視に非常に近い。小保内の角度錯視とは、「斜線の延長線上に垂直線の先端があるのだが、斜線が内側にずれて見える」現象である[1]。しかし本錯視は、小保内の角度錯視のように端点の延長線が交差する場合や、線分の外側で交差する場合では錯視量は小さく、線分の内側で交差する場合の方が錯視量が大きい。また、二本の線分が平行でも錯視が生じるので、二本の線分がつくる角度の錯誤というよりは、端点の誤定位が起きているようである。

ポッケンドルフ錯視も見方を変えれば端点間の方位が実際とは異なって知覚される現象（一本の直線が遮蔽物の後ろにあるので、端点同士をつなぐ線分は見えている線分と平行になるはずだが、そうは見えない）だが、本錯視は二本の線分の他に遮蔽物はないし、二本の線分は平行ではない場合にも起きるので異なる錯視である。

[ppt スライド3-6枚目] この錯視のヴァリエーションだが、もともとこの現象はスライド6枚目にあるように、ある時点でサイン波の位相が突然変化するという図を作成している時に発見した。錯視と関係ない論文の中にも錯視は潜んでいる…かも？

[1] 「幾何学的錯視一覧」http://www.psy.ritsumei.ac.jp/~akitaoka/chi05\_1b.doc